共生ニュース

ともしび

2022 年 1 月　第 4 号

共生・探究学習委員会



宮古の磯とろろ

70 期平和共生論文　代表論文タイトル一覧

301　T.C.　「未来 100 年における廃棄物との共存 幸福✖ゴミを紐解く」
302　S.H.　「日本における男性差別－性差別の被害者は女性だけか－」
303　M.F.　「難民の隣人になるために
－日本人の宗教的深層意識と難民受け入れ低迷の関係性ー」
304　I.M.　「日本における児童虐待の今を見つめる」
305　S.A.　「保育士の労働環境からみる日本の保育課題
－待機児童解消と保育の質確保を両立させるために－」
306　N.R.　「女性の経済的活躍を目指して～変化する社会を生きる私たちの働き方～」
307　M.A.　「海洋プラスチック問題をリードする
－廃プラスチックをアジア諸国に輸出してきた日本がすべきこと－」
308　H.M.　「メディアの中の LGBTs　～適切な表現とは～」
309　S.C.　「ホームレス問題の現状と自立支援　～孤立するホームレスを救うために～」
310　Y.A.　「住民主体の地域活性化
～「みんなの学校プロジェクト」成功への道のりを辿って～」

宮古海産物の再販について

文化祭で販売し、好評だった**「磯とろろ」**を再販します。とろろ昆布、削り節、スープがセットになったおいしいお吸い物で、1 パック 350 円程度の予定です。購入希望者は、校内各所に設置してある申込書に学年・クラス、氏名等を記入し、教員室カウンター上の封筒に提出してください。

◎申し込み期限：1 月 21 日（金）

◎　販売日時　：2 月 15 日（火）　　※1、2年生は通常授業日、3 年生は答案返却日

グローバルウィーク礼拝でのお話

昨年のグローバルウィーク中の礼拝で共生に関するお話がありました。ぜひ読み返してみて下さい。

S.Y.さん（3 年）

皆さんは、もし今、コロナに感染して、隔離されたまま、一生普通の生活には戻れないと言われたらどうしますか？ あり得ない。そう思うかもしれませんが、20 年前までの日本では実際にそのような政策がとられていました。1907 年から 1996 年までのおよそ 90 年間、ハンセン病にかかった患者は強制隔離され、完治しても外の世界には出られず、差別され続けてきました。2001 年に国は隔離政策が間違いだったと認め謝罪しましたが、いまだに「うつる病気・怖い病気」といった偏見や差別が根強くあるため、社会復帰の難しい状況が続いています。

そんなハンセン病について、私が衝撃を受けたある事件を紹介します。2003 年、ちょうど今の 3 年生が生まれた年です。9 月 17 日、熊本県はハンセン病療養所に入所している方の「ふるさと訪問事業」として 11 月 18 日から一泊、アイレディース宮殿黒川温泉ホテルに元ハンセン病患者 18 名の宿泊を予約しました。この事業は、強制隔離によって故郷を奪われた人々に「故郷に触れてもらいたい」と過去に何度も行われてきましたが、宿泊者が元患者であることは知らされていませんでした。しかし、11 月 13 日、宿泊者がハンセン病元患者であることがわかると、事情を知ったホテルは「他の宿泊客への迷惑」などを理由に宿泊を拒否。これに対し県は、ホテルの行為を人権侵害にあたるとして抗議をしましたが、ホテル側の方針は変わりませんでした。

この事件は、「宿泊したい」元患者と、「宿泊させられない」ホテルといった、簡単な話ではなく、その後、マスメディアや第三者である一般市民も加わり複雑に進展していきます。 ホテルの対応については賛否両論があるなかで、熊本県は、ホテルを刑事告訴し、これがメディアで報道されるとホテルは世間から強いバッシングを受けることになります。その後ホテルは謝罪をしますが、その形式的な謝罪に元患者らが拒否を示すと、今度は、「賠償金目当てか」「暴力団のようだ」といった全国から元患者に対する心ない誹謗中傷の匿名電話や手紙が相次ぎ、最終的には、ホテルが廃業に追い込まれる形で幕を下ろしました。

皆さんは、この事件を聞いてどう思うでしょうか？ 一見、差別をしているひどいホテルに聞こえますが、そんなに簡単なことでしょうか？一度、第三者の立場ではなく、ホテル側の立場に立って考えてみてください。 被害にあったのは今も療養所で暮らしている方々ですが、すでに病気は完治していて、感染の心配は全くありません。しかし、ホテル側からすると、差別・偏見が世間にある中で、わずか一晩泊めた客のために、その後の集客率の低下…というリスクを伴います。県や国がホテルに受け入れを促すことは簡単ですが、国民の内側に根付いた偏見を無理矢理正すことはできません。また、偏見とはいえ、感染を恐れて宿泊客がホテルの予約をキャンセルすることもまた、誰にも止められないのです。それは、ホテルの経営に直接響きます。そして、クチコミやネットなどにより「お客になる可能性のある人」を減らしていくかもしれません。だとすれば、ホテルに求められるのは、偏見を持った他の客のキャンセルや宿泊客の減少をものともせず、身を挺して差別や偏見と闘うことであり、結局、ホテル経営側が、偏見や差別の「コスト」を一手に引き受けることに他ならないのです。

実際、皆さんが宿泊客だったら、ハンセン病の元患者が宿泊していると知ったうえで、あえてこのホテルに宿泊するでしょうか？なんの迷いもなく、「泊まれる」と言えればいいのですが、ホテルがあるのは温泉街です。わざわざそこを選ばずに、隣のホテルを選ぶという人が多いのではないでしょうか。

私自身、ハンセン病について深く学ぶ前なら、泊まりたくないと思っていたのかもしれません。 私はこの事件について知ったとき、「差別・偏見は、いけない」という言葉だけがひとり歩きしているように感じました。この事件で、ホテルや元患者を叩いた人のうち、どれだけの人がその差別や偏見の背景まで知った上で批判していたのでしょうか。ただいけない、と匿名唱えるのは簡単ですが、それに見あう知識と正しい行動がなければ、本当の意味での差別は無くなりません。「正しく知って、正しく行動する」それが、差別・偏見のない社会を目指す、私たちに求められていることなのです。 ただ、私たちは、どうしても周りの目を気にして行動してしまいます。間違っていると分かっていても、批判されることが怖くて、周りに合わせ、どうしても最初の一歩を踏み出せません。いじめを見ても、「ただ遊んでいる」と目を逸らし無意識に傍観者になろうとするのです。

今日の聖書箇所でイエスは誰も触りたがらない重い皮膚病の者に近づき、手を差し伸べられます。すると、たちまち、重い皮膚病は清くなったというのです。 クラスのいじめが、行き過ぎたおふざけが、「もうやめよ」のたった一言で終わるのを何度も見たことがあります。でも、たった一言のことですが、私は言えたことがありません。たった、ではなく勇気が必要な大きな一歩です。でも、あなたがイエスのように差し伸べたその手に救われる人が必ずいます。そして、それが正しい行動なら、後に続く人が必ず現れます。だから、まず、あなたが一歩踏み出してみてください。

黒川温泉事件から 20 年がたち、世界中がコロナウイルスという新たな敵と戦う中、あるホテルが注目を浴びました。「ホテル三日月」中国・武漢からの日本人帰国者をいち早く受け入れた千葉県のホテルです。スタッフや地域住民への感染拡大の恐怖や、20 年前の事件同様、後の風評被害への懸念もあったはずですが、社長は政府からの要請に対し、「いつかどこかがやるのであれば、三日月が先にやる」と決断しました。 勿論、当初は三日月に対し批判の声も上がりましたが、ホテルの勇気ある行動に、不安の声は次第に応援の声へ、今では、「コロナが明けたら泊まりに行きたい」と称賛の声が相次いでいます。 今の世の中は、差別や偏見、誹謗中傷ゼロにはまだまだ程遠いですが、この 20 年で、一人一人が正しく知って、正しく行動し、偏見・差別のない社会に少しずつ近づいていると感じたニュースでした。そして、私も誰かのために一歩踏み出せる人になりたいと思っています。

T.C.さん（3 年）

SDGs は今年の調査で日本での認知度が54%になりました。特に10代は 70%を超え、認知の広がりがよくわかります。 私が SDGs と出会ったきっかけは中学生の時にもらったユニセフのチラシです。最初は何気なく眺めていたものでしたか、意識する生活としない生活では、世界の見え方が大きく変わりました。 私はスラムの様子を、児童労働の実態を、環境破壊を、世界の社会問題を全て間近で見たわけではありません。しかし、それは啓発しない理由にはならないと思っています。その事実を何かしらの形で知ってしまった以上、世界の人々が公言しているのであれば、私も参画し、伝えてきいきたい。このようなシンプルな思いで現在まで SDGs に関する様々な活動を行ってきました。 今回は SDGs を二つの側面から見ていきたいと思います。

一つ目はミネルヴァの梟です。ミネルヴァの梟は哲学者ヘーゲルの「法の哲学」の序文において、「ミネルヴァの梟は迫り来る黄昏に飛び立つ」と記述されています。ミネルヴァはローマ神話の女神、それに仕えている梟は知恵の象徴とされています。また梟は夜行性であり、夜が近づく黄昏になると飛び立ちます。黄昏は昼と夜の境目、映画「君の名は」でも特別な時間帯として登場しています。社会学的解釈からこの言葉をみると、フクロウは、

ミネルヴァに仕え、世界中の知識を集め、一つの時代が終焉を迎え、黄昏を迎えたとき、新しい智恵を開くために飛び立つというものです。つまり、梟は一つの文明や概念が終わろうとする黄昏時に飛び立って、夜というまだ見ぬ未来へ向かう存在であると言っています。 私は「我々は今、黄昏の最中にいる」と思っています。人類の多大な発明の数々により、世界は常に発展を共にしてきました。しかし、その代償として、地球規模の課題も顕著になっていきました。そして今、21世紀という節目とともに、世界全体がより一層グローバルイシューに取り組もうとしています。まさに今が転換期である黄昏です。もちろんこれまでも、沢山の方が社会問題に向き合っています。しかし、これからは誰かではなく、地球上に住む全ての人が協力し、解決していかなければならないのです。SDGsはそのための指針であり、我々はミネルヴァの梟のように、過去を見定め、次の時代に向かうための行動を起こしていかなければなりません。もちろん夜が暗く見えづらいように、未来というものは予測困難で、先行きが見えません。しかし、現実と向き合い、きたる未来を受け入れる、または作っていく姿勢を持つことが大切だと考えます。

二つ目は繋がりです。私はSDGsに関する様々な活動を通じて、多彩な繋がりを持ちました。SDGsはただの目標ではなく、コミュニケーションツールであるとも言われます。その言葉を持ち出せば、問題を考える・他者への思いやりを持つきっかけにつながり、目標の達成へと一緒に手を取り合うことができます。また繋がりは、目の前にいる人だけとは限りません。私たちは、遠く離れた地で難民として暮らしている方や森林火災の被害に遭われた方などとも繋がることができます。それは直接会わなくとも、想いを通わせることはできるからです。その問題に目を向け、考えた時点で、私たちの繋がりは生まれます。私が思う「繋がり」は思いやりです。思いやりがなければ繋がりは生まれないと思います。紐を繋がりとして例に出すと、お互いに紐を持つ時、相手を思うことなく片方が離してしまえば、その繋がりは途切れてしまいます。また社会問題との繋がりに関しては、問題としている側は、自分の手に紐を巻き付け、「解決して欲しい、助けて欲しい」と訴え紐を垂れ流しています。私たちはそれらの問題と向き合い、その紐を掴み取ることで繋がることができます。この思いやりこそが繋がりです。

繋がりは、向き合い、分かり合うことから始まります。私たちは置かれている立場や状況が違えば、考え方も違います。そのため、単に分かり合うといっても大変難しいです。しかし分かり合う努力はできます。その姿勢を崩さないことが、これからの未来に必要なのだと思います。分かり合う第一歩としてケネディ大統領の言葉を思い浮かべてみてください。「私たちの最も基本的な共通点は、全員がこの小さな地球に住んでいるということです。同じ空気を吸い、子供達の未来を大切にし、死すべき存在であるということです。」このように同じ地球に住む人間という共通部分から考えてみると、SDGsという大きな目標にも解決の兆しが見えるかもしれません。

今回の聖書箇所はコヘレトの言葉 7章10～14節です。この聖句のように、知恵は人々に命を与え、順境や逆境、未来において生き抜く力を与えてくれます。「昔の方が良かったのはなぜだろうかと言うな」という言葉からは、昔を羨むのではなく、昔の知恵を糧にして、今を前向きに生きることを訴えかけています。SDGsに関しても同様です。掲げている目標は確かに難しいですが、1mm関心を寄せるだけでも、考えは芽生え、逆境に立ち向かう勇気が湧き上がるはずです。知る・分かり合うという行為は、私たちに知恵を会得させ、明日を生き抜く力を与えてくれるのです。

「未来に希望はある」つい最近この言葉をかけてくれた方がいらっしゃいました。私はこの言葉を信じます。世代を超えて、国を超えて、手を取り合わなければならないこの瞬間を、私は未来に希望を持って生きる、これが今私にできることです。